

る軸と、「盲目の秋」から「木陰」「夏」に至る絶望、喪失、悔恨の軸とが交錯しながらこのパートを構成している。

としているが果してそう言い切れるのであろうか。また、二つの構成意図が「交錯しながら」存在するという場合それは明確な構成意図を究明できたといえるのであろうか。

加えて、この詩章に収められた詩の制作時期はちょうど長谷川泰子と別れの時期と重なるが、「少年時」という詩章名をあてた意図はいったい何であったのだろうか。

以上二点（「少年時」詩章の構成と章名に関して）について発表する。

## 《中国学》

### 中国近代における国家の認識

——『春秋公羊伝』はなぜ近代に蘇ったのか——

東洋大学非常勤講師 中村 聡

変法時期における近代の課題は、それ以前の改革項目を不可分の関係をもつトータル改革計画の一部と見做し、「全変」を行うことにあった。「全変」を行うためには、変革の原理それ自体を変革する必要があった。その変革の原理自体を変革することにこそ、変法派の独自性があったのである。

秦が中央集権統一国家を築いて以後、中国には国家という概念がなくなってしまった。そこにあるのは、中華という東アジアに独自

に展開した国際関係だけであった。しかし、一九世紀の地球的規模の国際社会中にあっては、中華という東アジアにのみ通用する国際関係は、もはや用を足さなくなってしまうたのである。各国が主権を持った対等の国として併存する国際社会の中で中国を存続させるためには、中華という世界観を捨てて、列国並立の単位とならざるをえない。近代中国の産みの苦しみは、すぐれてこの点にあった。国家とは何なのか。どのような国として生まれ変わるのか。近代の中国人には経験のない変化であった。その思考の拠り所は『春秋』に求められた。ここに『春秋公羊伝』の思想が日の目を見るのである。